資　料：

寺内文庫調査事始め

國守　進

○調査の端緒

私の寺内文庫見学の記憶は小学校低学年のころである。当時、山口にいた伯父に連れられて参観に出掛けたのであった。おぼろげな記憶では、寺内元帥の肖像画がかかり、桐の箱や立派な品物があり、年配の男性がおられた。その人は寺内家の親戚の方で、寺内元帥に似ているだろうと伯父が話しかけてくれたような、これもまことにおぼろげな記憶である。

昭和49（1974）年、県立山口女子短大に奉職した私は初めて文庫内に入り、コレクションの一端を拝見した。歴史関係図書や郷土資料が豊富であることや『大日本古文書』などがかなり揃えられていることに引かれ、調査の必要を感じるに至った。

文庫図書の調査はすでにある程度行われていたが、成立の経緯をふくめての総合調査を実施すべく、国文学科熊本先生・図書スタッフとの調査チームを結成した。そして文部省科学研究補助費（一般研究C『山口女子短期大学所蔵寺内文庫の研究』）を申請し、認められた。のち、国学院大学の藤井貞文先生が「寺内文庫は大切ですよ」と言われたという、出所不明の「噂」を耳にした。先生が科研費の審査委員であったのかどうか、全く分からないままである。

○調査の開始

調査費用が確保できたので、最初に着手したのは図書資料の目録作成のためのカード作りで、これを引き受けてくれたのが昭和50（1975）年度入学一年生の小松恵子・安光裕子君であった。大量の図書カードの作成をよく果たしてくれた。

文庫資料の調介の過程で朝鮮関係文書の存在も知られたことから、(1) 文庫成立の経緯（2）和漢書（3）朝鮮関係資料の3分野で行うこととし、(1)・(3) を國守、(2) を熊本先生が担当することとなった。もちろん、共通の調査部分も多いため、天理大学図書館などにご一緒することもあった。

小文では研究の概要や私の担当した分野を中心に記憶をたどって記すため、やや片寄った記述になったかも知れない。熊本先生のご努力の結果は『桜圃寺内文庫の研究』（以下『研究』）の「寺内文庫本和漢書について－文学書を中心に－」をご覧いただきたい。

○寺内家資料の調査

文庫の成立は寺内正毅逝去後三年めのことで、正毅氏と子息寿一氏の文庫への関わりも明らかでなかったこともあり、寺内家の資料は是非とも拝見したく、寺内寿一氏夫人順子氏のご了承をいただき、50年10月25日、大磯の寺内邸を訪問した。大磯駅からの道順をお尋ねしたところ「寺内とおっしゃればわかります」とのことであった。夫人も文庫については関心をお持ちで、多くの関係資料も好意的に借用させていただいた。おもな資料は『研究』に収めた。寿一氏の報告文で建築時期や毛利家事務所の原技師のかかわりなども知られた。夫人が寿一氏から文庫について聞かれたことがらのなかで、「正毅氏は臨終の病床で、寿一氏には文庫の完成のみを告げられた」は印象深い。

大正8（1919）年11月3日、正毅氏が逝去すると建築工事は翌9年春着工、10年12月に完成する。

○朝鮮関係資料の調査

寺内文庫所蔵資料のなかで異色なのは朝鮮関係簡牘・文書資料であろう。はやく田川孝三氏によって調査がなされているが、われわれは文庫の中で古文書をやや遅れて発見したように記憶している。朝鮮関係の記録では、例えば朝鮮信使来朝時、朝鮮使臣・萩藩儒臣の詩文応酬の記録「両関唱和集」（享保4、山口県文書館蔵）などは承知していたが、朝鮮の簡牘や古文書については全くの初見で困惑した。最初に朝鮮の官職制度や文書の形態などの理解が必要であった。『官案』（韓国図書館学研究会）や金東旭編『古文書集真』（延世大学校人文科学研究所）などは最も参考にした図書であった。その結果は『研究』に示すごとくである。学外の多くの先輩研究者のご指導は得たものの、やはり反省すべきことは多い。ただ、手の形を記した放売文書などは興味深く、私の古文書の講義でも紹介した。

関係資料のなかで異色ともいうべき資料が「高句麗広開土王碑」拓本であろう。5mを越える巨碑の取拓に感心しながらも、全容確認のために体育館で広げたことであった。拓本の写真は『研究』に解説とともに掲載した。『研究』は複数冊、国会図書館に収めた。当時、同碑はなお、研究上の論点のひ

とつであったが、本拓本について照会はなかったと記憶している。

その後、寺内文庫の朝鮮関係資料は紹介されることも多くなった。たとえば李元植「鮮やかな名賢の墨跡」（「統一日報1979.12.18、李氏提供）のなかで李氏によって『研究』が紹介されている。

○開庫次第

寿一氏の報告文も披露され、2月5日の開庫式も万端準備された。ところがこれより先、山県有 朋の危篤の噂が報ぜられて混乱を招きつつあった。2月1日、山県の逝去が1月30日午後6時（東京電）との報道（誤報）が流れたこともあり、2日に山県の平癒記念祭も計画されることもみられた。のち、逝去の日時が2月1日午後1時30分であることが公表されたので、今度は弔意を示す遥拝式が始まり、山県の葬儀、国葬（9日）のため寿一氏は急遽帰京、開庫式は流れたが、文庫は予定通り開かれた。文庫運営の評議員は陸軍少将国司精造・県学事兵事課長中谷秀・山口図書館長厨川肇・宮野村村長 古屋忠吉・桑原秋成。国司は児玉源太郎の後輩で同じ徳山藩士出身でのち昭和16年2月の寺内正毅追憶碑の除幕式にも列席している。

○元帥寺内正毅追憶碑

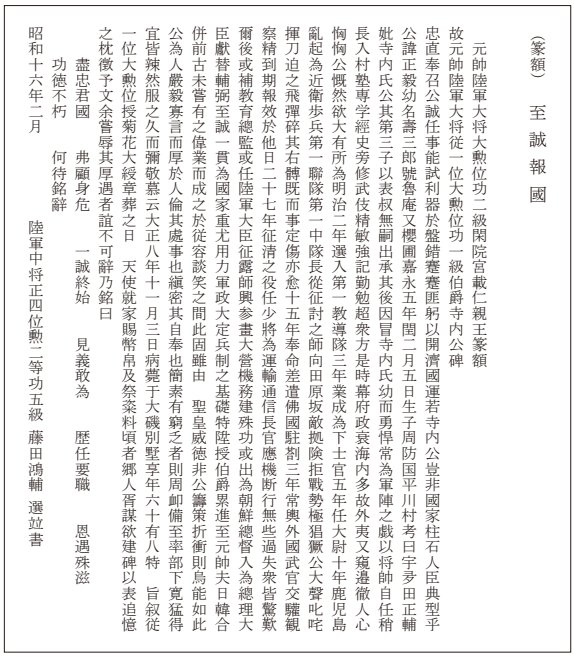
大正8（1916）年11月3日、寺内正毅が逝去して25年を経た昭和16（1941）年2月6日造立された。造立のうわさは以前から話題にのぼっていたが、予定通り正毅の生誕日を期して寺内文庫の域内で除幕式が行われた。碑文は正毅の生い立ちから履歴、事績に至るまでを詳細に記したもので、起草者 陸軍中将藤田鴻輔（1875-1943）は防府出身、明治44年、歩兵少佐に任官すると朝鮮総督寺内正毅の副官となり、五年にわたって寺内を補佐した。こうした寺内との関係から起草を依頼されたのだが、彼は雅号を「油渓」と称して漢文学の素養もあり、久坂玄瑞の歌碑を建立するなどの実績もあった。

篆額の筆者閑院宮載仁親王（1865-1945）は伏見宮邦家親王の第六子で閑院宮家を継承した。陸軍軍人で、明治15年フランスに留学するとき、寺内が補佐役を命じられている。昭和6年から参謀総長に任じ、同15年辞職した。

除幕式は多数の列席者があり席上、石工田村満吉氏に感謝状が贈られ、起草者藤田も寺内正毅について語ることがあった。

式後、朝鮮館で直会が行われ、秦雅尚中将の万歳三唱で閉会した。秦は大政翼賛会山口県協力会議長であった。そしてこの年11月、寺内寿一は南方軍総司令官に任じられたのである。

現在の元帥寺内正毅追憶碑



（篆額）　至誠報國

元帥陸軍大将大勲位功二級閑院宮載仁親王篆額

故元帥陸軍大将従一位大勲位功一級伯爵寺内公碑

忠直奉召公誠任事能試利器於盤錯蹇蹇匪躬以開濟國運若寺内公豈非國家柱石人臣典型乎
公諱正毅幼名壽三郎號魯庵又櫻圃嘉永五年閏二月五日生子周防国平川村考曰宇夛田正輔
妣寺内氏公其第三子以表叔無嗣出承其後因冒寺内氏幼而勇悍常為軍陣之戯以将帥自任稍
長入村塾専学經史旁修武伎精敏強記勤勉超衆方是時幕府政衰海内多故外夷又窺邊徹人心
恟恟公慨然欲大有所為明治二年選入第一教導隊三年業成為下士官五年任大尉十年鹿児島
亂起為近衛歩兵第一聯隊第一中隊長從征討之師向田原坂敵拠険拒戰勢極猖獗公大聲叱咤
揮刀迫之飛彈碎其右髀既而事定傷亦愈十五年奉命差遣佛國駐劄三年常輿外國武官交驩観
察精到期報效於他日二十七年征清之役任少將為運輸通信長官應機断行無些過失衆皆驚歎
爾後或補教育總監或任陸軍大臣征露師興参畫大營機務建殊功或出為朝鮮總督入為總理大
臣獻替輔弼至誠一貫為國家重尤用力軍政大定兵制之基礎特陞授伯爵累進至元帥夫日韓合
併前古未嘗有之偉業而成之於從容談笑之間此固雖由　聖皇威德非公籌策折衝則烏能如此
公為人嚴毅寡言而厚於人倫其處事也縝密其自奉也簡素有窮乏者則周卹備至率部下寛猛得
宜皆辣然服之久而彌敬慕云大正八年十一月三日病薨于大磯別墅享年六十有八特　旨叙従
一位大勲位授菊花大綬章葬之日　天使就家賜幣帛及祭粢料頃者鄕人胥謀欲建碑以表追憶
之枕徴予文余嘗辱其厚遇者誼不可辭乃銘曰

盡忠君國　弗顧身危　一誠終始　見義敢為　歴任要職　恩遇殊滋
功徳不朽　何待銘辭

昭和十六年二月　陸軍中将正四位勲二等功五級　藤田鴻輔　選竝書

（篆額）至誠報國